



くすりと健康

一般社団法人
神戸市薬剤師会

華岡青洲

唐突ですが和歌山県立医科大学の校章をご存知でしょうか。花と「医」の文字があらわれたデザインです。医科大学ですから「医」はわかりますが、花も当然医学に関係ある花なのです。華岡青洲から連想できた方はお薬と歴史に造詣が深いと思われるます。

その花は、曼陀羅華（曼荼羅華）マンダラゲという白い花です。花のデザインは陶芸家の富本憲吉の作とのこと。因みに、「日本麻醉科学会」のシンボルマークにも曼陀羅華の花が使われています。

現在の手術には麻酔は当然おこなわれますが、青洲の時代にはまだ確立されてなく、外科の手術はされても大変だったわけで、麻酔薬の発見は時代の流れとともに急がれていたはずですよ。

青洲が考案した全身麻酔薬「通仙

散」別名「麻佛散」は、曼陀羅華・烏頭まんとらすずが主成分で、川芎せんきょう、当归とうき、白芍びやくなど10種類ほどの植物から構成されていたようです。全容は残念ながら伝わっておらず不明です。曼陀羅華・烏頭は毒性が強く、青洲は「通仙散」の用い方の危険性を考慮し、処方を残さず広めなかったのかもしれませんが。

曼陀羅華の有効主成分はスコポラミンとヒヨスチアミンで、烏頭はアコニチンといわれる物質です。これらの化学物質は中枢神経に作用します。

青洲は有能な外科医の先駆けであり、薬を求めて紀州の山を駆け巡り、生薬に精通した薬剤師でもあったのです。

和歌山県紀の川市に「青洲の里」があります。そこには、青洲が作り名付けたテーマパーク風の「春林軒しゅんりんけん」が常設されています。平屋の家屋には患者の診察や処置をおこなう診療所と医学校があり、そして住居も兼ね備えています。今の時代から考えれば木造の小さい建物と狭い敷地

あり、粗末な設備に映るかもしれません。しかし丁寧に見学していくと先人の知恵と工夫が端々に詰まっています。

内部には青洲の遺品や医療に使用された道具類の資料が並び展示室があり、手術刀などを見ていると、なんだか南方仁のように一瞬タイムスリップしたかの思いで、二人のOG薬剤師はかなり盛りあげました。

またそばには建築家黒川紀章により設計されたフラワーヒルミュージアムがあり、先程の日本家屋とは違うユニークなデザインの建物です。

最高に暑い日に出かけ、車のアイスポックスから出てきた冷えたお茶の美味しさは忘れません。友人に感謝し楽しい一日でした。

派手さがまったくない地味な施設ですが、医薬に興味のある方は楽しめます。

ぜひ一度！

(東灘区 鹿嶋)